



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	新聞記事データベースを利用した「鳥肌が立つ」の 使用実態調査
Author(s)	呉, 琳
Citation	研究論集, 93(左)-108(左)
Issue Date	2016-01-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.15.l93
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60548
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_008_wu.pdf



新聞記事データベースを利用した「鳥肌が立つ」の使用実態調査

呉 琳

要 旨

「鳥肌が立つ」という慣用句をよく見聞きする。これは本来、寒気や恐怖、あるいは不快感などのために、人の皮膚が毛をむしりとした後の鶏の皮の表面のようにぶつぶつになる現象を指す。しかし、近年では、感動や興奮した場合にも「鳥肌が立つ」という表現が用いられる。これは1980年代から広まり、その後、広く認められて一般化した用法であると言われているが、具体的な調査研究はまだなされていない。

かつて誤用扱いされていたこの用法は、現在では、新用法として多くの辞書に記述されるようになった。たとえば、『広辞苑』第6版では、「とりはだ(鳥肌)」の下位項目として「鳥肌が立つ」を立て、解釈に「近年、感動した場合にも用いる」とあり、その例文として、「名演奏に鳥肌が立った」という一例が掲載されている。

本研究では、この慣用句の使用実態を探るために、北海道大学附属図書館を通して検索できる新聞記事データベースのなかから、朝日新聞記事データベース「聞蔵II ビジュアル」に絞り込み、「鳥肌が立つ」の用例分析を行う。

1. 本研究の目的

辞書は個々の言葉について、発音・意味・用例など様々な情報を提示し、語彙学習上欠かせない道具であり、外国語学習において重要な役割を果たしていることは言うまでもない。一方、辞書の解説には各種の相違が見られ、学習者を混乱させてしまうこともある。たとえば、現代日本語では、「鳥肌が立つ」という慣用句をよく見聞きする。これは本来、寒気や恐怖、あるいは不快感などのために、人の皮膚が毛をむしりとした後の鶏の皮の表面のようにぶつぶつになる現象を指す。しかし、近年では、感動や興奮した場合にも「鳥肌が立つ」という表現が用いられる。この用法を「新用法」として追認する辞書がある一方で、「誤用」とする辞書もあり、

相反する解説がなされる。

では、辞書の記述に食い違いが生じる場合、言葉の意味・用法をどのように捉えればよいのか。少数の用例はその言葉の使用実態を完全に反映できないし、個人の母語話者の内省だけに依存したのではやはり捉えきれない。このような言葉の諸相を正確に把握するためには、多数の用例を集めることが必要である。そこで、本研究は慣用句「鳥肌が立つ」の意味・用法に取り組み、コーパスから得られる多数の用例を観察することで、その使用実態を明らかにしたい。

鳥肌を立たせる原因として、寒さや恐怖などのネガティブな原因と、感動などのポジティブな原因が挙げられる。『日本国語大辞典第2版』によると、「鳥肌が立つ」の初出は室町時代初期に成立した『源氏物語』の注釈書『河海抄』(1362頃)であり、寒いときに使われる表現であるという。また、近代以降の国語辞典における「鳥肌」の記述を調査したところ、「鳥肌」という言葉は当初、もっぱら寒さを表していたことが判明した(付表)。本研究では辞書の記述を踏まえ、寒さという原因をネガティブな原因から独立させ、本来の用法とする。「鳥肌が立つ」という慣用句に見られる多様な用法は次の三種類に大別できる。

I 本来の用法

II ネガティブな用法

III ポジティブな用法

このうち、II ネガティブな用法とは、否定的な意味に使用される用法で、その下位分類として、恐怖や不快などが挙げられる。また、III ポジティブな用法とは、肯定的な意味に使用される用法で、その下位分類として、感動や興奮などが挙げられる。I と II は従来、正しいとされる用法、いわゆる「正用」、III はしばしば「誤用」と指摘される用法である。はたしてこの言葉は、I 本来の用法から II ネガティブな用法、さらに III ポジティブな用法へと意味変化の方向性を見せているのか。そして、日常よく見聞きするのはどちらの用法であるのか、こうした疑問が本研究の出発点である。

この疑問を解決するためには、まず、「鳥肌が立つ」という慣用句が現在、どのように使用されているのかを調査する必要がある。そこで、本研究は新聞記事データベースに現れた用例を調査分析し、この慣用句の使用実態を探ろうとするものである。なお、本研究は、日本語において、「正用」や「誤用」について結論を出そうとするものではない。あくまでこの表現の使用実態を明かすことが本研究の主題である。

以下では、まず、「鳥肌が立つ」の用法に関する世論調査の結果を再検討し(第2節)、ついで、新聞記事データベースから用例採集を行い、各種の意味について例示しつつ検討した上で、この表現の使用状況及びその変化を探る(第3節)。

2. 「国語に関する世論調査」結果の再検討

「鳥肌が立つ」に関する興味深いデータとして、平成 13 年度（2001）の文化庁「国語に関する世論調査」がある。「a 余りのすばらしさに鳥肌が立った」、「b 余りの恐ろしさに鳥肌が立った」という二つの言い方のどちらを使うかを尋ねた結果、

a の方を使う …… 22.8%

b の方を使う …… 46.8%

どちらも使う …… 17.8%

どちらも使わない…… 11.7%

ということが分かった。およそ半数の人が「鳥肌が立つ」を従来の正しいとされる使い方を使用しているが、それとは異なる意味で使用する人も 2 割以上いる。このデータを年齢別に示すのが図 1 である（数値はパーセンテージを示す）。

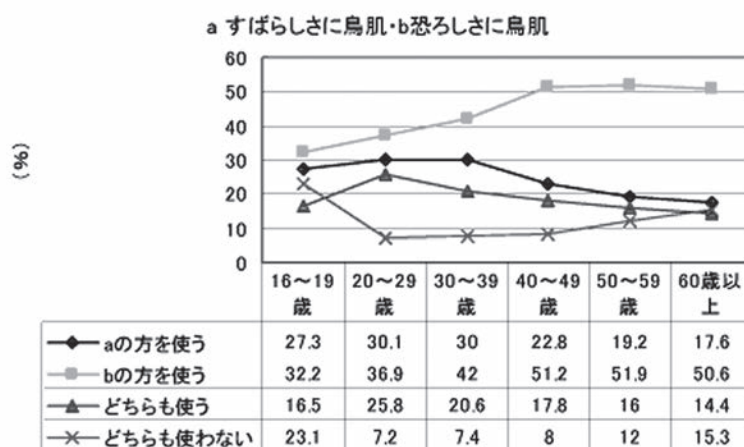


図 1 「鳥肌が立つ」の使用意識（年齢別）

文化庁「平成 13 年度『国語に関する世論調査』の結果について」より転載

図 1 からすべての世代において、b の使用率が a を上回ることが分かった。つまり、a をⅢポジティブな用法、b をⅡネガティブな用法とすれば、いずれの世代においても、「鳥肌が立つ」はネガティブな用法として使用される傾向が強いことを示唆する調査結果である。言い換えれば、従来正しいとされる使い方が優位に立つということになる。

ところが、10 代では、a と b の使用率はそれぞれ 3 割前後占めており、大差はあまり見られないが、上の世代に向かって（図を左から右に向かって）見ていくと、全体的には a の使用率が低くなる反面、b の使用率が高くなる傾向にあり、使用率の差が大きくなる。特に、高年層では、半分を超える人が b を使うのに対して、a の使用率は 2 割以下となり、使用率に大きな差が見られる。

この図を逆に右から左に向かって見ていくと、従来の使い方である b の使用率は下がっている。つまり、高齢の世代の人たちに比べて若年の世代の人たちは b のように使わなくなっている。これに反して、従来の使い方とは異なる用法である a の使用率は時代が下るにつれて上昇している。つまり、高齢の世代の人たちに比べて若年の世代の人たちは a のように使う傾向が強い。要するに、「鳥肌が立つ」のポジティブな用法の浸透率が若い世代においてより高いということが窺われる。

平成13年度の「国語に関する世論調査」は、「鳥肌が立つ」をポジティブな用法で使うか、それともネガティブな用法で使うか、それを問うことにより、この慣用句の使用意識を調査しているのである。そこから得たデータを再検討した結果、従来の使い方とは異なる意味で使用する人が2割以上存在し、特に若い世代において、浸透率が高いことがわかった。では、実際にはどのような使用状況が反映されているのであろうか。次節では、使用実態解明のために用例採集を行う。

3. 新聞記事データベースを利用した使用実態調査

3.1 調査概要

本節では、北海道大学附属図書館を通して検索できる新聞記事データベースのなかから、朝日新聞記事データベース「聞蔵IIビジュアル」に絞り込み、「鳥肌が立つ」の用例を調査分析する。朝日新聞社の「聞蔵IIビジュアル」は日本国内外の多くの大学や図書館などに利用されるオンライン記事データベースであり、その概要は次の通りである。

- ① 1879年(明治12年)の創刊号から今日まで、135年を超える期間に刊行された紙面から、約1,350万件の記事・広告が検索可能。日本国内最大級の新聞記事データベースで、沖縄を除く46都道府県の全地域面を収録。
- ② 1984年から現在までは記事の全文検索、テキスト本文の表示が可能。
- ③ 1879年から1989年までは記事の見出し・キーワード等による検索、紙面イメージ(PDF)の表示が可能。
- ④ 雑誌「AERA」「週刊朝日」の記事も収録。
- ⑤ 2005年11月以降は切り抜きイメージ(PDF)も利用可能。

「聞蔵IIビジュアル」を利用し、まず、1984年から2014年までのおよそ30年間の記事を対象に、表記のゆれと動詞の活用形を考慮して「鳥肌が立+鳥肌がた+鳥膚が立+鳥膚がた+とりはだが立+とりはだがた+トリハダが立+トリハダがた」¹で検索したところ、1,767件²がヒッ

¹ これらの表記のなかで、最も多いのは「鳥肌が立」(1,458件)で、「鳥肌がた」(299件)がそれに次ぐ。

² この数字はヒットした記事の総件数を表すものであり、検索語が出現した例文の数を数えたもので

トした。見出しに検索語が見えるが、著作権などの関係で本文を表示できないため、意味・用法の確認ができない例1件と以下のようなメタ言語的な例13件を除くと、残り1,753件となる。

- (1) サッカーの試合で「ゴールが決まって鳥肌が立った」と選手やサポーターが話します。でも辞書では「鳥肌が立つ」とは「寒さや恐怖などで人の皮膚が毛をむしりとった鳥の肌のようになること」。読者の方からも誤用との指摘があります。では、興奮や感動で鳥肌が立つことはないのでしょうか。(下線は筆者による、以下同様) (2005/01/30 朝刊)

このような用例は「鳥肌が立つ」という言葉の意味自体を問題にする記事であるため、本研究では研究対象から除外する。

この1,753件の用例に出現した「鳥肌が立つ」は如何なる用法として使用されているか、これについて判断する際、筆者はまず各種の用法と共起する主なキーワードを以下のように分類・整理した(下位分類の用法は〈 〉で示す)。

I 本来の用法

〈寒さ〉:「寒い」,「冷え切る」,「冷え込む」,「冷氣」など

II ネガティブな用法

〈恐怖〉:「恐ろしい」,「危険」,「恐怖(感)」,「怖い」など

〈嫌悪感・抵抗感〉:「嫌」,「嫌い」,「嫌悪感」,「不快」など

〈衝撃〉:「あきれる」,「(良くない意味で)驚き」,「衝撃(的)」など

〈緊張〉:「緊張(感)」など

その他:「気持ち悪さ」,「不安」,「恥ずかしさ」,「退屈」,「絶望」,「悔しさ」

III ポジティブな用法

〈驚き〉:「(良い意味で)驚き」,「意外」,「(良い意味で)衝撃」など

〈感動・感激〉:「感慨深い」,「感激」,「感動」など

〈興奮〉:「快感」,「興奮」,「ドキドキ」,「奮い立つ」など

〈すばらしさ〉:「圧倒される」,「美しい」,「すごい」,「すばらしい」,「絶妙」など

〈達成感〉:「～してよかった」,「できた瞬間」など

〈喜び〉:「うれしい」,「歓喜」,「たのしい」,「喜び」など

そして、以下の作業手順に沿って、用例分析を行った。

まず、I 本来の用法、II ネガティブな用法、III ポジティブな用法のどれに当てはまるかを判

はないことを断っておきたい。たとえば、同一の記事において、見出しと本文の複数の箇所に検索語が現れた場合は1件とみなした。また、同じ発言が複数の記事に引用される場合はそれぞれ1件として数えた。

断する。次いで、下位分類の用法を分析する際、前後の文脈に上記のキーワードが現れた場合はそれに従う。もし、前後の文脈に上記のキーワードが現れない場合、筆者が記事の全文や関連する記事を読み、どちらの用法に近いかを判断する。

なお、用法分類の際は、あくまで前後文脈に出現したキーワードを優先させた。以下のように、同じ甲子園開会式の入場行進で、選手それぞれが違う意味合いで「鳥肌が立つ」を用いる場合、(2)をⅢの用法（興奮）、(3)をⅡの用法（緊張）とそれぞれ判断した。

- (2) 開会式が終わって仲間のもとに戻ってきた△△、△△両選手は「選手宣誓を聞きながら鳥肌がたってしまった。県大会と比べて拍手の音も観客の人数も全然違う」と興奮がまだ冷めない口ぶりだった。(1996/08/09 朝刊)
- (3) 大阪大会の準決勝で延長十回裏に逆転サヨナラ勝ちの本塁を踏んだ△△君は「選手宣誓が終わって観客席からの拍手を聞いたとたん、全身に鳥肌が立った。すごく緊張していた。(後略)」と、笑顔をのぞかせていた。(1996/08/09 朝刊)

3.2 各種用法の用例について

この1,753件の用例に出現した「鳥肌が立つ」の意味・用法について分析すると、まず以下のような記事がある。

- (4) 今年の夏、二度、鳥肌が立った。(2005/12/27 朝刊)

この「二度」とは、同年8月20日の甲子園で駒大苫小牧が57年ぶりの連覇を達成した瞬間と、2日後の8月22日「野球部長が生徒に暴力をふるったらしい」ことを知ったときである。対象語には、「連覇を達成した瞬間の喜び」というⅢの用法と「暴力をふるったと知ったときの衝撃」というⅡの用法の両方が読み取られる。このように、ⅡとⅢ両方の用法として使用される例がわずかながら6件あった。

この6件を除き、残り1,747件の用例には、Ⅰが45件、Ⅱが331件、Ⅲが1,371件ある。表1は各種の用法の用例数を年ごとにまとめたものである。

表1 各種用法の年間用例数

年	Ⅰの用法	Ⅱの用法	Ⅲの用法	対象外	年間用例総数
1984	0	1	0	0	1
1985	0	0	0	0	0
1986	0	0	2	0	2
1987	0	1	1	0	2
1988	0	6	1	0	7
1989	1	2	7	0	10

1990	1	7	9	0	17
1991	1	7	5	1	14
1992	0	3	10	0	13
1993	3	6	12	0	21
1994	2	11	17	0	30
1995	0	16	19	0	35
1996	2	9	24	1	36
1997	1	14	43	1	59
1998	1	17	65	1	84
1999	3	14	46	1	64
2000	3	18	77	2	100
2001	3	16	57	0	76
2002	0	18	74	0	92
2003	2	12	69	1	84
2004	2	17	72	1	92
2005	3	14	72	2	91
2006	4	15	62	2	83
2007	1	15	67	1	84
2008	1	12	76	1	90
2009	3	11	71	1	86
2010	3	11	76	0	90
2011	2	10	69	1	82
2012	1	13	92	1	107
2013	1	13	100	2	116
2014	1	22	76	0	99
用例総数	45	331	1,371	20	1,767
割合	2.58%	18.95%	78.48%		

時間の経過に伴う各種用例数の変化は図2の如く。

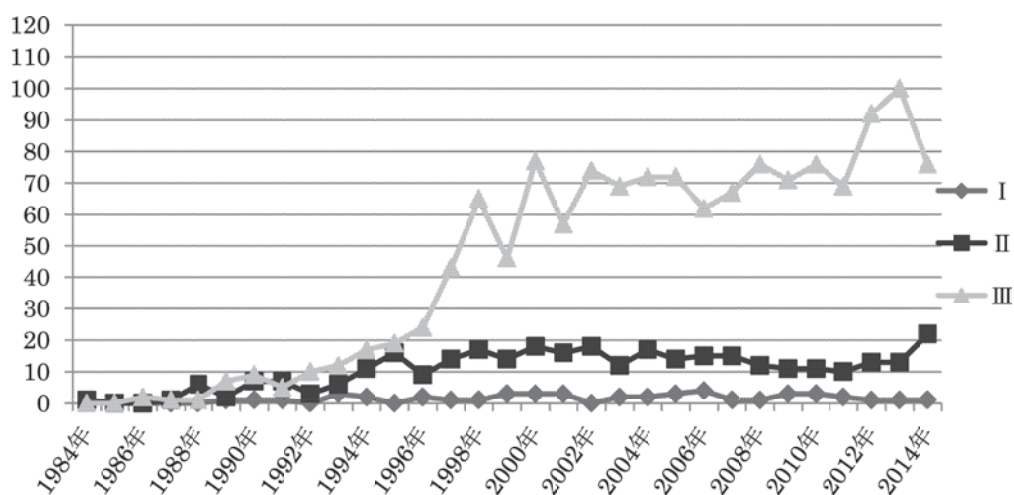


図2 新聞記事データベースにおける各種用法の年間用例数推移

1,747 件のうち、I 本来の用法として使用されている記事はきわめて少なく、全体の 2.58% を占めている。毎年の用例数は 0 例から 4 例の間で変動し、激しい用例数の増減は見られない。この 45 件の中には、主に次のような記事が多い。

- (5) 記者も水球歴 10 年のプライドをかけて応じるが、全身が震えて、うまくボールを受け取れない。海から上がると、芯まで冷え切った体は赤くなり、鳥肌が立ったままだった。(2010/01/06 朝刊)

これは長崎市の皇后島（通称ねずみ島）に約 100 年続く正月行事、寒中水泳「泳ぎ初め式」が行われたときの記事であった。午前 10 時すぎ、12 度の水温という過酷な状況で、海で立ち泳ぎをしながら水球ボールのパス回しをする。強い寒さに刺激され、体に鳥肌が立ったことは想像に難くない。つまり、これは実際身体に起こった生理現象を指す用例である。ほかの用例もすべて同様に、寒さを感じるとき、体に「鳥肌が立つ」という現象自体を表現している。

II ネガティブな用法の用例数は全体的に不規則な走向を呈しているが、2000 年あたりをピークにやや減少する傾向にあると言えよう。内容としては、以下のような恐怖を感じるときに使用される記事が数多くある。

- (6) 「あの時の恐怖は今も忘れられない。思い出だけで鳥肌が立つくらいだ」。鹿児島市喜入支所嘱託職員の△△さん（61）は、未知との遭遇を回想する。(2010/06/19 朝刊)

II の下位分類に位置する用例をみると、戦争や地震、津波などの被害状況や事件を實際目にしたときの恐怖、あるいはテレビの映像を見た時の衝撃、または苦手なものを見たとき、苦手なものや音を聞いたときに生じる嫌な気持ちを表す用例が数多く見られる。特に恐怖に使われている用例が 116 件 (35.05%) と最も多く、衝撃を表す用例 (92 件, 27.79%)、嫌悪感を表す用例 (54 件, 16.31%) が続く。

しかし、II の用法が使用されるとき、実際に体に鳥肌が立ったのかを判断することは難しい。たとえば、次の 2 例はどうであろうか。

- (7) 昆虫や両生類が大の苦手で、見ただけで鳥肌が立つという松山市内の主婦(37)。小学生と幼稚園児がアマガエルを 10 匹捕まえて帰り、自宅で「飼う」と言い出したので驚いた。(1998/08/19 朝刊)
- (8) 企画したのは東北公益文科大学生らによる「選挙で GO! ～一票いれとく?～」実行委員会。代表の同大 3 年△△さん (22) が、今春の酒田市長選で友人ら 20 人に投票の有無を尋ねたら「政治と聞いただけで鳥肌が立つ」「面倒くさい」などの理由で、全員が棄権してい

たのに驚いたのがきっかけだった。(2003/10/20 朝刊)

苦手な昆虫を見たとき、実際嫌悪感で体に鳥肌が立つかもしれないが、果たして政治を嫌がる人は、「政治」と聞くだけで鳥肌が立つのであろうか。政治に対する抵抗感があるため、「政治」と聞くだけで嫌な気持ちが出てくる。その嫌悪感がまるで体に鳥肌が立ったときと同じような異様な感覚である。したがって、実際鳥肌が立たなくても「鳥肌が立つ」という表現を用いて、人あるいは物事に対する抵抗感や嫌悪感を示すのではないかと思われる。

一方、Ⅲポジティブな用法に使用されている用例数は78.48%と最も多く、約全体の8割を占める。この用法は約30年の間で、著しく増加しており、現在ではほかの用法より圧倒的に多い。この用法の用例数が最も多い2013年には、年間用例総数116件のうち、対象外の例が2件、Ⅰが1件、Ⅱが13件、Ⅲが100件と全体の86.21%を占める。

このようにそれぞれの年において、ⅡとⅢのどれが優位に立つ用法であるかを見比べた結果、およそ1990年代からⅢの用法がⅡの用法を上回り、そのうち、Ⅲの用法が大幅に増加し、現在では「鳥肌が立つ」という慣用句の主要な用法になったことが分かる。前節で取り上げた「国語に関する世論調査」が行われた2001年時点では、すでにⅢの用例数がⅡの用例数を超え、使用実態調査は使用意識調査と異なる結果となった。

内容としては、以下のようなすばらしさを表す記事が多く見られる。

- (9) 尾張徳川家19, 20, 21代当主の各夫人の、明治、大正、昭和と三世代にわたるひな壇飾りにずらりと並んだ人形は150体超。2人は「すごい、鳥肌が立ってきた」とその迫力に圧倒された。(2011/03/02 朝刊)

これはひな祭り前日の記事である。「すごい、鳥肌が立ってきた」と発言した2人は、あるアイドルグループのメンバーであった。2人は名古屋市の徳川美術館で開かれる特別展「尾張徳川家の雛まつり」を見てまわり、いかにも華やかで、愛らしい、大名家ならではの雛の世界に圧倒された。このように、すばらしい芸術品や美しい景色に圧倒されるとき、そして、球児が甲子園のグラウンドに入った瞬間、迫ってくるようなスタンドや客席の雰囲気圧倒されるとき、演奏や歌を聴いて音が共鳴するときに「鳥肌が立つ」という表現がよく用いられる。これらの「すばらしさ」を表す用例は1,371件のうち、合わせて654件(47.70%)ある。ほかにも感動を表す例が237件(17.29%)、喜びを表す例が208件(15.17%)、そして興奮を表す例が180件(13.13%)ある。

さらに、Ⅲポジティブな用法は、競技試合に関する記事において使用率が非常に高いことも、今回の調査を通して明らかになった。Ⅲの用例には2件のうち1件が競技試合に関わる記事であると言い切っても過言ではない。今回「聞蔵Ⅱビジュアル」を用いた調査結果では、Ⅲの用

法に使用されている1,371件のうち、野球試合に関する記事が533件、サッカーや水泳などその他のほかの競技試合に関する記事が254件あり、合わせて787件となる。

Ⅲポジティブな用法の用例が非常に多く見られるが、しかし、これらの用例については、多くの場合が単なる強調表現であるとも考えられ、実際に鳥肌が立ったかどうかの判断は難しい。たとえば、以下の2件を見てみよう。

(10) 狭い道路をトラックで走っていた△△さん(57)は「白煙に気が動転して、バックのまま約200メートル走って逃げた。思い出しても鳥肌が立つ」と語った。(1991/05/24 夕刊)

(11) <フリービット社長 △△(41)>

初代総合政策学部長だった△△は、会いにいくとすぐ、自分の名刺に「この学生にご引見ください」と紹介文を書き添えて渡してくれた。「君たちは未来からの留学生だ」という△△の言葉は、「今、思い出しても鳥肌が立つメッセージ」という(2013/07/29 週刊)

例(10)は、1991年5月24日の朝、長崎県雲仙・普賢岳が噴火した記事である。溶岩が崩れ、白煙が沢づたいに走ったのを見て、慌てて避難するふもとの住民たちが「鳥肌が立つ」と語った。つい当日発生したばかりの噴火を思い出すと、そのすさまじい光景がありありと目に浮かぶ。この「鳥肌が立つ」というのは、体に実際起こった現象かもしれない。

しかし、例(11)で語り手が思い出すのは、慶應義塾大学に在学したとき、初代総合政策学部長からの熱いメッセージであった。20年くらい前のメッセージを今思い出してもパワーを感じ、体に鳥肌が立つような感じがする。この「鳥肌が立つ」というのは単なる強調表現であるとも考えられる。

3.3 初出例について

では、Ⅲの用法はいつごろから現れたのか。今回の調査範囲で検索したところ、次の記事がもっとも古い。

(12) 地域の再開発で揺れる青森・下北半島の人々を追ったドキュメンタリー映画「六ヶ所人間記」を見て、鳥肌が立つ感動を覚えた。感動は他人にも伝えたい。(1986/07/19 夕刊)

ここまでは1984年以降の記事を対象に検索したが、1984年以前の記事はどうであろうか。1879年～1989年の記事を「見出しとキーワード」で検索したところ、見出しとキーワードに「鳥肌が立」の例はなかった。なお、表記を変換し、「鳥肌がた」/「鳥膚が立」/「鳥膚がた」/「とりはだが立」/「とりはだがた」/「トリハダが立」/「トリハダがた」で検索してもヒットはなかった。

一方、「鳥肌」/「鳥膚」/「とりはだ」/「トリハダ」のみを検索語として、「見出しとキーワード」

で検索した結果、5件の該当があった。これらの例に対し、紙面イメージ（PDF）の表示から「鳥肌」の意味・用法が確認できた。以下、明治・大正、昭和（戦前）、昭和（戦後）に分け、用例の見出しのみを示す。

○1879年～1926年 明治・大正

該当なし

○1926年～1945年 昭和（戦前）

(13) いれずみオリムピック 鳥肌だっても寒うはない〈写〉(1936/08/21 東京/夕刊)

○1945年～1989年 昭和（戦後）

(14) トリハダ __聴診器 (1965/06/28 東京/朝刊)

(15) 日系人強制収容補償めぐり対立 恥ずかしくて鳥肌 ハヤカワ上院議員 苦労知らぬと激怒 マツイ下院議員__大戦時の日系人補償問題 (1982/12/16 東京/朝刊)

(16) 冷房病対策 冷やし過ぎは禁物です 鳥肌立ったら危険信号__金曜ひろば (1984/07/06 東京/朝刊)

(17) 「鳥肌の立つ」番組を期待__TV時評 (1989/12/24 東京/朝刊)

明治・大正期に用例が見当たらず、初出は1936年である。初出例は見出しからも分かるが、寒さを感じる時に使う本来の用法である。念のため、紙面イメージのPDF表示を確認すると、江戸彫勇会刺青競艶納涼会で中老の男性が名主瀧の涼風に鳥肌立って、ご自慢のいれずみをすっぱりと見せびらかすという内容であった。やはり、寒さを表す用法であることに間違いない。

続く4件の例は1945年以降に出現したものである。例(14)は生れつき、鳥の皮のようにざらざらしている皮膚のことを指す。本研究で取り上げてきた対象とは別の用法であるため、ここでは除外する。

例(15)は、米議会において、強制収容の補償問題をめぐり、日系政治家間で熱い対立が生じ、補償要求を主張する側がいる一方で、「補償請求するなんて恥ずかしくて鳥肌が立つ」と反対発言をする人もいるという記事である。この「鳥肌が立つ」は「恥ずかしくて鳥肌が立つ」とあるから、IIネガティブな用法であると判断する。

また、例(16)の本文に「鳥肌が立つのは温度が低すぎるという危険信号」とあり、I本来の用法であると判断する。

例(17)の本文³に、「若手製作者の実験室であることは構わないが、ほとんどが口あたりのいい

³ これは1989年12月24日付けの記事であり、PDFで表示した紙面イメージの本文に「鳥肌が立つ」が現れたため、本来は1984年～2014年の記事を対象に検索するときもヒットするはずである。しか

映像の冒険で終わっているのが残念である。願わくば、90年代はTVの時代と予感させるような、鳥肌が立つような、番組の出現を期待したい」とある。当時のテレビ放送の現状に対する批判と今後の番組への期待が読み取られる。「鳥肌が立つ」は「すばらしさで鳥肌が立つ」という意味合いを持ち、Ⅲポジティブな用法である。

以上、朝日新聞記事データベースを用いて検索可能な範囲の記事を見たところ、「鳥肌が立つ」という慣用句が最初に現れたのは1982年12月16日付けの記事である。ただし、それ以前には「鳥肌立つ」（1936年8月21日付けの記事）という慣用句の変異形⁴で現れ、Ⅰ本来の用法として使われていた（1936年8月21日付けの記事）。なお、「鳥肌が立つ」がⅢポジティブな用法で使用される初出例はやはり、1986年7月19日付けの記事であることに変わりはない。

3.4 調査結果

朝日新聞の記事データベースを利用し、「鳥肌が立つ」という慣用句に見られる各種の意味・用法に使用される用例数の比較や用例数の推移について考察を加えた結果、以下のことが分かった。

第一に、Ⅰ本来の用法の使用率がきわめて低く、Ⅱネガティブな用法の用例数も比較的少ない反面、現在ではⅢポジティブな用法が約全体の8割を占め、圧倒的に多い。新聞記事データベースを利用した使用実態調査は「国語に関する世論調査」による使用意識調査と異なる結果となっている。かつて誤用扱いされていたⅢポジティブな用法は、現在では、もはや市民権を得た用法として広く使用されていることが分かった。

第二に、Ⅱネガティブな用法の下位分類として、恐怖感を表す用例が三分の一を占め、衝撃、嫌悪感を表す用例数が続いている。一方、Ⅲポジティブな用法の下位分類として、すばらしさを表す用例が最も多く、全体の半分近くある。感動、喜び、興奮を表す用例数が続いている。これらの用法に使用される「鳥肌が立つ」は必ずしも実際の生理現象を表すとは限らず、単

し、実際検索をかけたときは、この記事はヒットしなかった。1989年の記事を対象に、「『鳥肌の立つ』番組」で検索したところ、この記事の見出しがグリーンで表示し、著作権などの関係で本文が表示できないことになっている。そのため、テキスト本文の検索ができず、上記1,767件の記事には含まれていない。

⁴ 慣用句の変異形については石田(1998)を参照。慣用句は形式的に固定しており、決まった形として使用されるが、形式上の変化を全く示さないわけではない。たとえば、「目が覚める」、「口を出す」、「耳に挟む」には、それぞれ構造あるいは構成要素が部分的に異なる複合語や慣用句（「目覚める」、「口出し」、「小耳に挟む」）がある。これらの複合語や慣用句のように、ある慣用句と形式的かつ意味的に対応関係にある表現形式を「慣用句の変異形」と呼ぶ。石田は、部分的に一致する二つ（以上）の表現形式は、語彙体系のレベルでは同等の資格を持ち、互いが互いの変異形であるとして、これを共時的な視点から検討している。本研究に言う「変異形」もまた、共時的な観点から、二つの表現は、互いが互いの変異形の関係にあるものとして、これを「変異形」と表現する。

る強調表現であるとも考えられる。

第三に、Ⅲポジティブな用法は、スポーツに関する記事において使用率が非常に高いこと、特に野球に関する記事によく出現することが明らかになった。

第四に、複合語「鳥肌立つ」が1936年8月21日付けの記事に現れ、Ⅰ本来の用法として使用されたことがあるが、「鳥肌が立つ」という慣用句自身が最初に現れたのは1982年12月16日付けの記事である。この慣用句がⅢポジティブな用法として初めて使用されるのは1986年7月19日付けの記事であり、およそ90年代以降Ⅲの用法がⅠとⅡの用法を上回り、増加していったことが分かった。執筆する記者が30歳くらいとすると、生まれたのは、1960年前後になる。おそらく昭和30年代以降に生まれた記者が第一線で記事を書くようになってから広く使われるようになったのではないと思われる。

最後に、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの用法はいずれも瞬間的な感情に対して用いることが多いが、しかし、「鳥肌が立ちっぱなし」や「ずっと鳥肌が立っていた」という例も8件見つかった。これらの用例はすべてスポーツに関する記事であり、Ⅲの用法として使用されていることが分かる。

4. 今後の課題

以上、現代日本語における用例を中心に分析を行った結果、いくつかの結論に至った。この慣用句の意味変化の方向性について、筆者は本来の寒さを表す用法から恐怖などのネガティブな用法に派生し、さらにポジティブな用法へと広がってきたと想定したが、新聞記事データベースにおける各種用法の用例の初出年代はそれほど離れていないので、今回の調査では、これを裏付けるデータは得られなかった。

また、「鳥肌が立つ」が使われる前に、感動を表す表現としてどのようなものが使われていたのか、それらの表現は「鳥肌が立つ」とどのような関連性があるのか、検討する必要がある。

この慣用句の意味・用法がどのような変遷を経てきたのかについて解明するためには、調査資料を増やしながら初出例をさかのぼり、その使用例について通時的な視点から更なる調査分析が必要である。これらについては、今後の課題としたい。

(ご りん・言語文学専攻)

参考文献

- 朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」(最終確認期間2015年5月1日～5月16日) <http://database.asahi.com/library2/>
石田プリシラ(1998)「慣用句の変異形について——形式的固定性をめぐって——」『筑波応用言語学研究』5 筑波大学人文社会科学研究科文芸・言語専攻応用言語学領域 pp.43-56

- 小林賢次（2007）「すばらしい演技に鳥肌が立つ」『問題な日本語 その3』北原保雄編著 pp.40-43
- 新村出編（2008）『広辞苑』第6版岩波書店
- 日本国語大辞典第2版編集委員会（2001）『日本国語大辞典第2版』第9巻小学館
- 文化庁（2001）平成13年度「国語に関する世論調査」の結果について（確認日：2014年11月5日）http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h13/kekka.html

付表 国語辞典における「鳥肌」の記述

刊行年	書名	とりはだ	寒さ	恐怖	興奮	一が立つ
1884-85	『ことばのその』	—	—	—	—	—
1888	『漢英対照いろは辞典』	○（鳥膚）	○	—	—	—
1888	『ことばのはやし』	○	—	—	—	—
1889-91	『言海』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1892-93	『日本大辞書』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1894	『日本大辞林』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1896	『日本大辞典』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1896	『帝国大辞典』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1898-99	『ことばの泉』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1911	『辞林』改訂第18版	○（鳥肌）	○	—	—	—
1915-28	『大日本国語辞典』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1925	『広辞林』新訂版	○（鳥肌）	○	—	—	—
1927	『改修言泉』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1932-37	『大言海』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1935	『辞苑』	○（鳥肌）	○	○	—	—
1936	『大辞典』第19巻	○（鳥肌）	○	○	○	—
1943	『明解国語辞典』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1949	『言林』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1954	『辞海』縮刷版	○（鳥膚・鳥肌）	○	○	—	—
1955	『広辞苑』第1版	○（鳥肌）	○	—	—	—
1963	『岩波国語辞典』第1版	○（鳥肌）	○	○	—	—
1969	『広辞苑』第2版	○（鳥肌）	○	○	—	—
1971	『岩波国語辞典』第2版	○（鳥肌）	○	○	—	—
1972	『新明解国語辞典』初版	○（鳥肌）	△	△	—	○
1973	『広辞林』第5版	○（鳥膚・鳥肌）	○	○	—	○
1976	『広辞苑』第2版補訂版	○（鳥肌）	○	○	—	—
1978	『学研国語大辞典』初版	○（鳥膚・鳥肌）	△	△	—	○
1979	『新明解国語辞典』第2版	○（鳥肌）	△	△	—	○
1979	『岩波国語辞典』第3版	○（鳥肌）	○	○	—	○
1981	『新明解国語辞典』第3版	○（鳥肌）	△	△	—	○
1983	『広辞苑』第3版	○（鳥肌）	○	○	—	△
1986	『岩波国語辞典』第4版	○（鳥肌）	○	○	—	○
1988	『学研国語大辞典』第2版	○（鳥肌・鳥膚）	△	△	—	○
1988	『大辞林』初版	○（鳥肌）	○	○	—	○

1991	『講談社国語辞典』第2版	○（鳥肌・鳥膚）	○	○	—	○
1991	『広辞苑』第4版	○（鳥肌）	○	○	—	△
1995	『三省堂国語辞典』第4版	○（鳥肌・鳥膚）	○	○	—	○
1995	『大辞林』第2版	○（鳥肌）	○	○	—	○
1996	『新明解国語辞典』第4版	○（鳥肌）	△	△	—	○
1996	『岩波国語辞典』第5版	○（鳥肌）	○	○	○	○
1997	『新明解国語辞典』第5版	○（鳥肌）	△	△	—	○
1998	『広辞苑』第5版	○（鳥肌）	○	○	—	△
2000	『岩波国語辞典』第6版	○（鳥肌）	○	○	○	○
2001	『日本国語大辞典第2版』	○（鳥肌）	○	○	△	○
2005	『新明解国語辞典』第6版	○（鳥肌）	△	△	—	○
2006	『大辞林』第3版	○（鳥肌）	○	○	○	△
2008	『広辞苑』第6版	○（鳥肌）	△	△	△	○
2009	『岩波国語辞典』第7版	○（鳥肌）	○	○	○	○
2012	『新明解国語辞典』第7版	○（鳥肌）	△	△	△	○

注：「とりはだ」の欄の○は見出し語として立項されていること，○の後に付する（鳥肌）や（鳥膚）はその表記，「寒さ」，「恐怖」，「興奮」の欄の○は言及されていること，△は用法が「鳥肌」の解釈には見えないが，「鳥肌が立つ」の解釈や例文に見えること，「鳥肌が立つ」の欄の○は「鳥肌が立つ」が立項されていること，△は立項されていないが，掲載した用例に見えることを示す。